大阪と漆工

序
第一章　近世大阪と漆
一、漆商のまち近世大阪
二、近世大阪における漆器製作と販売
第二章　近代大阪と漆
一、資料に見る大阪漆工
（一）共進会と博覧会の報告書にみる大阪の漆工
（二）雑誌記事にみる大阪の漆工
二、近代大阪における漆器制作
（一）漆器商と輸出
（二）芝川又右衛門と日本蒔絵合資会社
（三）武者小路千家十二世愈好斎好みの茶道具
結語

土井久美子

序

平成二十年宮島久雄先生を中心に、数人が集まり大阪近代工芸に関する研究会を立ち上げ、二年間にわたって資料収集や聞き取りなどを行った[1]。その結果、これまでで日本漆工史の視点からは殆どとりあげられることのなかった大阪の漆工に関するいくつかの事実が明らかになった。具体的に例をあげると、経済史においては既に既知のことだが、近世大阪が漆の集積地であったことである。そして明治に入ると大阪の漆器卸商は金沢や京都から漆工を集め、輸出を視野にいれた蒔絵の制作を開始し、なかでも実業家芝川又右衛門は良質の作品を作る蒔絵師を養成する学校を運営していたこと。大正末年から昭和初年にかけて柴崎和岬は大阪を本拠に『日本漆器新聞』を刊行したこと。そして実業界の興隆とともに数寄者が増え、茶道具を制作する職方として漆工が大阪に移り住んでいたことなどである。当然ながらこれらの事象は断片的に知られてはいたが、どのよ

1　『二〇〇九年サントリー文化財団助成研究・報告書　近代大阪の工芸に関する総合的研究』平成二十三年刊行　代表者　篠雅廣（大阪市立美術館館長）

うに交錯しながら大阪の漆工界が形成されていたかについては明らかではなかった。

本稿では市史や区史など近代に編纂された大阪関係の史書の記述、『漆と工芸』や『日本漆器新聞』など漆器関係の雑誌記事、内外の博覧会、共進会、展覧会に関する報告書などに見られる漆に関する資料を整理し、大阪における江戸から明治、大正期にかけての蒔絵師や塗師の動向を整理し、当時の大阪漆工界の状況についてまとめた。[2]

第一章近世大阪と漆

一、漆商のまち近世大阪

近世において大阪は水陸交通の要にあり、金融・物流の中心地であった。そのため大阪には各地で生産された様々な物資が集まり、そこから再び全国へと送り出されていた。大阪を経由して流通した主用な原材料の一つに、油、薬種、銅などとならんで漆があった。[3]

大阪に初めて漆を扱う商人が現れた時期については必ずしも明らかではない。しかし天正年間（一五七三～一五九二）には、近江、京都、堺へ漆販売が盛んに行われており、元和元年（一六一五）、戦禍を避けて紀州、堺に避難していた漆屋仁右衛門（島本休味）が大阪に戻り明暦二年（一六五六）に没するまで北久太郎町で漆商を営んでいた。また仁右衛門には三人の息子がおり、長男は仁衛門、次男は治郎右衛門、三男は弥三右衛門といい、いずれも明暦年間（一六五五～一六五七）に吉野屋をなのって大阪で漆を商ったことなどが伝えられる。[4]『漆商旧記』には寛永八年（一六三一）大阪町奉行久貝正俊が漆屋仁左衛門、漆屋治郎右衛門、漆屋弥三右衛門の三人に漆を商う免許を与えたと記される。[5]

江戸期の漆は国産と、唐漆とよばれる中国からの輸入品があった。大阪に集積した国産漆は主に越前、越後産であり、丹波、丹後、伊勢、吉野などが若干含まれていた。当初大阪商人はこれらの産地の「山方漆掻（以後漆掻と記す）」に直接資金を貸与し漆を収穫させ、人を派遣し荷を取り寄せ大阪で売買していた。ところが元禄年間（一六八八～一七〇三）頃、漆掻にしばしば不正が行われたため、資金を漆掻に直接渡すことを中止した。そして漆掻の仲介者として大阪から商人を派遣し、山方案内人と称するその商人に資金を融通し、山方案内人が持ち帰った漆を出資者が分配するという形式をとるようになった。大阪では出資者を「漆仲買」といい、仲介する山方案内人を「漆問屋」とよび、その両者を「漆商」と称すようになる。漆仲買は小売と卸売を兼ね、産地から仕入れた生漆を精製加工し塗師職に販売した。一方中国産の輸入漆は元禄年間（一六八八～一七〇三）頃になると、毎年中国から長崎に到着し、そこから長崎下り

2　報告書に掲載した資料をもとに江戸期から大正期までの大阪における漆工関連の事項をまとめ表3年表にした。昭和から現代にかけては今後さらに調査したい。

3　『商人の舞台－天下の台所・大阪』p.48　平成八年、大阪市立博物館に簡略にまとめられている。近世大阪は「大坂」と表記するのが一般であるが、ここでは総て大阪とした。

4　「大阪漆商の沿革」『漆のあらまし』p.5昭和四十六年、鳴神株式会社

5　『東区史』第三巻　p.436に漆商旧記からの抜粋とある。『漆匠旧記』については山田博利氏が一九七一に刊行された『漆匠旧記―漆商舊記：附・大阪漆仲間定嶋本家由緒書留―』がある。

商人を経由して大阪にもたらされた。これらもまた漆仲買によって加工販売された。享保年間（一七一六～一七三五）には朝鮮半島産の漆の販売もはじまった。

延宝七年（一六七九）、大阪における漆を商う商人の数が増加し、販売競争が激化したため、商いを円滑に行うため、二十軒の漆商が集まり「戎講」という漆仲間、いわゆる同業者組織を結成した。ところが漆商の興隆にともない新規参入の漆商が増加し、新参者が別に住吉講を結成することとなったため、商いの円滑を計るため寛延四年（一七五一）住吉講と戎講が戎講の一本に統合された。弘化三年（一八四六）に刊行された『買物独案内』には「諸漆所」として南本町三丁目いずみや善兵衛、南久太郎町堺筋西入吉野屋嘉兵衛、北久宝寺町なには橋西入吉野屋善兵衛、南本町四丁目よし乃や善助、南久太郎町なには橋入黒川屋三右衛門、博労町なには橋南入吉野屋太郎兵衛らの漆商があげられる。戎講に加わった商人は延宝七年（一六七九）に二十軒、延宝八年（一六八〇）には三十軒、天和元年（一六八一）に二十四軒、元禄三年（一六九〇）には三十三軒、享保十五年（一七三〇）には四十七軒、明和五年（一七六八）には五十六軒であった。明治十五年（一八八二）、大阪漆商組合と名称を変え、明治・大正期・昭和初期太平洋戦争による漆液の統制が始まるまで続いた。[6]

二、近世大阪における漆器製作と販売

近世大阪の商業の中心地は船場を含む旧大阪市東区であった。その歴史を記した『東区史』第四巻文化篇〈資料⑩〉は「大阪丼池筋には古くから春慶塗の雑器を作る店があった。」と記す。[7] 春慶塗は漆塗りの技法の一つで、素地に透き漆をかけ、木目など素地の風合いを生かして塗る技法で、椀や盆など実用の器の制作に用いられる。ここに記された丼池筋とは、現在、大阪の南と北の繁華街を結んで走る御堂筋の二本東側に江戸期からある筋である。

十七世紀末から十八世紀にかけて刊行された大阪の地誌『懐中難波すずめ』（延宝七年〈一六七九〉三月）、『増補難波すずめ跡追』（延宝七年五月）、『難波鶴』（延宝七年七月）、『難波鶴跡追』（延宝七年八月）、『難波丸』（元禄九年〈一六九六〉四月）には、「塗物類　難波ばしすぢ」、「ぬしや　順慶町」、「わん家具　堺すぢ」、「わん家具　真斎橋順慶町」などと記される。即ち、塗物類を取り扱う店は難波橋筋に、塗師屋が順慶町に、椀・家具を扱う店が堺筋と心斎橋筋順慶町にあったことがわかる。「塗師屋」は漆塗を行う職人をさす。そして「塗物類」、「椀家具」と記される業者は漆塗の道具を製作販売、または販売していた店である。「堺筋」「難波橋筋」「心斎橋筋」は江戸期に商業の中心であった船場を南北に走る道で、東から堺筋、難波橋筋、そして数本西が心斎橋筋となる。一方順慶町は東西に走

6 『漆のあらまし』p.7 より以下抜き書き。「この戎講は明治十五年、大阪漆商組合と名称を変え、明治・大正期・昭和初期まで続いた。大阪漆商組合は昭和十四年、戦争の影響により関西漆精製工業組合となり、原材料の入手、精製漆の配給まで総てが統制された。終戦後昭和二十二年、多くの業者が廃業するなか、残った業者によって大阪製漆組合が再結成された。しかし原材料の入手困難の状況が変わらなかった。統制は終戦によって↘↙も解除されず、昭和二十五年まで続いた。統制が解除されても、漆にかわる代用塗料や化学塗料の出現により漆の需要そのものがなくなり、大阪で商われる漆の量も激減してしまい、現在では僅かに数軒の漆商が大阪に遺るのみとなっている」

7 『東区史』第四冊文化篇、第二章芸術、二漆工藝附陶磁工藝。旧東区は一九八九年に旧南区と統合され中央区となった。

る道であり、船場の南限を東西に流れる長堀川に近い。これらの記述のうち東西、南北の筋から位置を割り出せるのは「椀家具　心斎橋順慶町」の記述である。前述の『東区史』に記された井池筋は心斎橋筋の一本東側の通りであることから、心斎橋あるいは井池筋の順慶町のあたりに江戸時代を通じて、椀や家具など日用品としての漆器を製作し販売する店があったとわかる。

正徳二年（一七一二）に大阪の医師寺島良安によって出版された百科事典『和漢三才図会』の巻三十一「包厨具」の「盌」の項目には「今モ亦攝陽順慶町　漆椀家多有之」、「江州日野　紀州根来　同黒江　奥州会津　摂州大坂　同堺　京師　皆作之　其根来椀最佳今絶不出以京大阪之椀為上」とある。[8] つまり『和漢三才図会』にも前出の地誌の記述と同じく、順慶町に漆椀を売る店が多くあったと記される。加えて大阪が日野（滋賀県）、根来（和歌山県）、黒江（和歌山県）、会津（福島県）、京都（京都府）とならんで漆椀の産地であったこと。根来が絶えてしまったので、京と大阪の椀が上手とされていたなど、現在では考えられない椀生産地としての大阪の姿がえがかれる。『和漢三才図会』に記される他の産物「日野椀」、「根来」、「黒江塗」、「会津漆器」、「京漆器」については既に各所が漆器産地として言及される。しかし大阪と堺が江戸時代に椀の産地であったことについては、現在ではあまり認識されていない。

大阪の旧市街地には、塗師をはじめとして、筆師、墨師、琴三味線師、経師表具師、鼈甲細工師、人形師、数寄道具師、指物屋、畳職、木地職、桶樽職、革細工職、足袋装束屋、唐弓弦や、袋物屋、扇屋など日常生活で必要な様々なものを製造する手工業者がたくさん居住していた。これら様々な職人のうち大工、木挽、屋根葺、桶師、左官などの一部は、元和年間の大阪城築城のために徳川氏によって山村与助の支配下に伏見から集められた職人で、伏見時代には山村与助と縁のなかった井戸掘、石切、畳刺、鍛冶、塗師、貼付師などの一部も御用職人としてその配下に属すものとされたことが延享五年（一七四八）の『改正増補　難波丸項目』に記される。[9] これら御用職人のうち塗師職として「道修町二丁目　椀屋仁兵衛　ぬしや　甚七」の名が見える。同書にはまた北久太郎町より安堂寺町まで、難波橋より三休橋までの間に塗師職が住んでいたこと、時期は不明であるが、椀折敷家具一切塗師職仲間という株仲間を組織しており、その株は百五十軒、嘉永年間（一八四八～一八五四）の株仲間再興後には二百十二人であったと記す。そして前述の『漆商旧記』によれば、これら椀折敷家具一切塗師職仲間と漆商の間に寛政七年（一七九五）、安政二年（一八五五）の二回漆の価格高騰をめぐる争いが生じたとわかる。[10]

一方これらの塗師職に木地を提供していたのは、木地職であった。木地職は諸国から大阪にもたらされた粗挽きの木地を問屋から買い、註文に応じて挽きなおし塗師職人などにおろしていた。安永九年（一七八〇）、椀盃食籠木地職仲間を組織していた職人は十二人、仲間以外に三人の木地職がいた。天保三年（一八三二）木地職仲間に轆轤挽物職仲間が統合され、椀盃食籠轆轤挽物職仲間となった。これらの職人は物価の高騰で天保九年（一八三八）頃にいったん減

8　『和漢三才図会上』p.385、昭和四十五年東京美術

9　『改正増補　難波丸項目』

10　前掲『漆商旧記』

り安政五年（一八五八）頃には二十四軒に増加している。前述の延享五年の『改正増補　難波丸項目』によれば轆轤職は平野町難波橋筋、北久太郎町栴檀木橋筋あたりに集まっていたとわかる。

再び『東区史』〈資料⑩〉を見ると、「然し蒔絵等の高級品は、京都・江戸・金沢などから取よせ、需要に応じて居た様に思われる。その結果漆器問屋の類は徳川時代から相当に繁盛し、東区にも大きな商店があった。」とある。[11] ここから、江戸期の大阪では、春慶塗、漆塗の椀・膳など日常の器が自給されていたのに対して、蒔絵など高級漆器は生産されておらず、京都、江戸、金沢などから取り寄せられて漆器問屋によって販売されていたことがわかる。つまり水運の中心であった、大阪においては、高級漆器を産地から取り寄せて商う漆器問屋が発達していたのである。[12]

第二章近代大阪と漆

一、資料に見る大阪漆工

（一）共進会と博覧会の報告書にみる大阪の漆工

以上江戸期の大阪と漆の関わりについて概観した。漆の流通の中心であり、原材料は容易に入手できたことから日常漆器は自給されており、同様の理由により、高級漆器は漆器問屋が京都・江戸・金沢から買い付けて販売していたことがわかる。しかし明治に入るとその動き変化があらわれる。

明治期の大阪における漆器制作の動向を窺う資料として国内外で行われた博覧会、そして共進会に関する報告書をとりあげる。明治政府は富国強兵、殖産興業を国是として、西欧列強諸国に追いつこうと様々な勧業政策を打ち出した。新たな技術を獲得するため、輸出によって外貨を獲得する必要が生じる。日本からの輸出品は当初生糸、茶、銅などの原材料と、陶磁器、漆器、七宝などの手工芸品であった。これらのすぐれた物産を展示し、販路獲得のために日本が参加したのは、欧米で開かれていた万国博覧会であった。同じく国内の他地域の物産や新たな技術を国民に啓蒙するために開催されたのが内国博覧会であった。また輸出対象となった生糸、茶、銅、陶磁器、漆器などの生産を促進するため、全国規模の展示や集会を通し、産地間の情報交換、相互の技術交流を計る目的で共進会が各地で開催された。こうした博覧会、共進会の開催後に編纂された出品目録、審査報告など詳細な報告書のなかから大阪の漆器に関する記事を抜粋し表2にまとめた。

明治政府が初めて参加した明治六年（一九七三）の澳国博覧会（以下ウィーン万国博覧会）には政府のよびかけによって多くの物産が出品された。この博覧会に出品した手工芸品が好評を得たため、政府は以後これらの輸出を促進したとされる。柴田是真の蒔絵をはじめ、東京、横浜、金沢、京都などから漆器が出品された。しかし大阪から出品された漆器はごく僅かで、藤沢彦兵衛出品の堆黒、堆朱など彫漆系の菓子器や盆など七点のみであった。同九年（一九七六）、

11　東区に寛永期に創業した東門五兵衛という漆器商がいたことについては註17参照

12　前述の延宝年間に刊行された『懐中難波すずめ』、『増補難波すずめ跡追』、『難波鶴』、『難波鶴跡追』には蒔絵屋が難波橋筋にあったことを記している。また元禄九年に刊行された『難波丸』には「蒔絵　心斎橋筋　野村徳兵衛」「蒔絵　難波橋筋」とあるため、蒔絵師あるいは蒔絵を取り扱う店が全く存在しなかったわけではない。

米国フィラデルフィアで独立百年を記念して開催された米国費府博覧会（以下フィラデルフィア万国博覧会）の開催時にも日本から漆器が多数輸出された。東京の起立工商会社、新井半兵衛、箕田長次郎らが収集あるいは制作を委嘱した器物をはじめ、京都、金沢などの産地からの出品が相次いだ。この博覧会では新製品ばかりでなく、市場に大量にあった古漆器が数多く出品されたことが特筆される。しかし大阪から出品されたのはウィーン万国博覧会にひき続き、藤沢彦兵衛出品の堆黒による菓子器、盆、重箱などおよそ五十点のみであった。国内に目を転ずると、明治十年（一九七七）に上野で第一回内国勧業博覧会が開催されている。この時もまた東京を中心に多くの漆器が出品されているが、大阪から出品されたのは福田源次郎・住川重助の連名による陶胎蒔絵の花瓶一口のみである。

翌明治十一年（一九七八）にパリで開催された万国博覧会は日本の展示区画に産業製品を展示するばかりでなく、トロカデロに設けられた古美術展示会場にヨーロッパのコレクターとともに日本古美術の展示を行い、あわせて博覧会事務局は日本全国の地誌と日本の歴史を編纂して、出品作品の解説とともに翻訳し二千五百部を発行した。この時博覧会事務局が収集しパリに移送、展示した作品は尾形光琳作「八橋蒔絵螺鈿硯箱」など、四点の重要文化財（現在）を含み、鎌倉時代の作品四点、室町時代の作品十八点、桃山時代一点、江戸時代五十八点、明治期の模造作品七点など、錚々たるものであった。[13] 一方、新製品は起立工商会社、箕田長次郎、新井半兵衛など各地の輸出業者をはじめとする嘱品家が蒔絵師や漆工に委嘱して制作された。しかし残念ながら大阪からはこの博覧会には漆器は出品されていない。その三年後、明治十四年（一八八一）に上野で開催された第二回内国勧業博覧会には東区安土町東門五兵衛[14]による蒔絵菓子器、広蓋など六点、また北浜五丁目田中達三郎出品による蒔絵鼈甲または蒔絵象牙製扇骨の扇子十五本と低調であった。

大阪を除外すれば、実際には明治期の万国博覧会における漆器の出品はフィラデルフィアとパリにおいてピークを迎えたようである。明治十年代の前半頃を境に、古器物の優品は市場から姿を消し値が上がる。第二回内国勧業博覧会の出品評によればこの頃の漆器は輸出を意識するあまり、装飾過剰となり、玩弄趣味に陥ってしまう。そして粗製濫造による粗悪品が輸出され、湿度が低く、特に冬期に暖房によって乾燥の激しい欧米では漆器の破損が大きな問題となりはじめる。そのため、明治十年代の終盤には輸出漆器の人気にかげりが生じた。ところが、記録上にみる大阪における漆器制作の動向は明治十年代の終わり頃から増加に転じる。

内国勧業博覧会から四年後の明治十八年（一八八五）に上野公園で開かれた繭糸織物陶漆器共進会は漆について農商務省の主催により開かれた初めての全国規模の共進会であった。漆器は四区二類で、大阪からは五人二十三件が出品している。同年十一月に農務省工務局から刊行された『繭糸織物陶漆器共進会第四区陶漆器審査報告附録講話会筆記』[15]によれば、「大阪府は陶漆器とも産出少し故に其出

13 「1878年パリ万国博覧会に出品された日本の漆工」『万国博覧会の美術』二〇〇四、東京国立博物館他

14 東門五兵衛については註17及び次節参照

15 「繭糸織物陶漆器共進会第四区陶漆器審査報告附録講話会筆記」第一共進会出品漆器ノ概見　塩田真 p.1

品も亦僅々たり」とある。[16]

翌明治十九年（一八八六）に農商務省から発行された『府県漂器沿革漆工伝統誌』（資料①）によれば、大阪府の漆器業者としてはわずかに東区安土町東門五兵衛[17]、東区博労町春井清三郎[18]、南区八幡町土井清兵衛の三名があげられるのみである。

明治二十一年（一八八八）には京都御苑で第三回関西府県連合共進会が開かれた。大阪からは後に日本蒔絵合資会社を起こす、かつて蒔絵師であり、実業家となった芝川又右衛門が高描金山水図料紙箱・同硯箱、蒔絵三十石船乗合ノ図　図形硯箱、高蒔絵香箱、研出蒔絵唐草模様硯箱など五点を出品している。この時京都からは輸出会社を経営する池田清助が蒔絵器物を四点出品している。池田清助はこの頃京都に移っているが大阪にいたこともあり、神戸で漆器を含む美術工芸品を欧州に輸出する越後屋丸越組を経営しており、大阪在住の漆工とも深い関わりのある人物であった。

大阪における漆器制作はこのように、明治十年代の終わり頃から徐々に増加し、二十年代以降増えていく。明治二十三年に開催された第三回内国勧業博覧会には東門五兵衛とならんで、南区鍛冶屋町の蔦田英三郎（英輝）、東区伏見町の芝川又右衛門、南区鰻谷東之町の安原清、東区高麗橋の小国長兵衛、西区江戸堀の加藤武左衛門が加わっている。この時芝川又右衛門が出品した蒔絵六角形介類図香合は妙技三等賞を受けている。このうち東門五兵衛、芝川又右衛門は小国長兵衛らは職工ではなく漆器商、漆器卸商などである。後述するが、安原清は輸出商池田清助によって明治十年代の半ばに金沢から招聘された蒔絵師であり、この頃から大阪の漆器制作が政府の勧業政策に基づき徐々に輸出主体へとシフトしていったことが博覧会、共進会出品動向から見ても明らかである。

さらに明治二十六年のシカゴコロンブス博覧会には四名の出品者があがり、そのうち後に美術品輸出商として財をなす山中吉郎兵衛[19]（一八四七～一九一七）、前述の芝川又兵衛が起こした蒔画合資会社が出品者に加わる。このとき日本蒔絵合資会社が出品した作のうち「芙蓉薔薇鶉蒔絵額」は東京国立博物館に収蔵されている。[20]

明治二十七年七月に石川県金沢市で開催された第五回関西府県連合共進会は翌年に編纂された復命書によれば、大阪からの出品が五十七点、四十名、うち受賞者が十九名であった。同書には「本府の漆器は従来格別声価を有せざりしが、近年諸家の勉励により大いに進歩を著し、ほとんど金沢に亜くに至れり」、「今回の出品も工作畧整ひ実用に適するもの多し」、「受賞品中蒔絵硯箱は図様本府の特技を頗る鮮麗なり箱の形ち稍薄きに過きたり」、「本府の漆器は形状図

16　『繭糸織物陶漆器共進会第四区陶漆器審査報告附録講話会筆記』明治十八年十一月　農務局・工務局、第一共進会出品陶漆器ノ概見　塩田真

17　同書には、第二回内国勧業博覧会の出品者でもあった東区安土町四丁目の東門五兵衛が寛永年間に漆器商店を開き、江戸期には諸藩に漆器を供給、つまり漆器問屋であったことが記される。明治四十四年に大阪商業会議所から発行された『大阪商工名録』には東門五兵衛（ふぢ五、婚礼道具其他家具類及美術蒔絵漆器、内国各地、卸売）とある。

18　また春井清三郎（不詳～一八八四）は蒔絵師であり、輸出漆器の製造に携わり、京都から大阪に移り神戸の丸越組に輸出漆器を供給していたことが記される。春井清三郎は次代が継いだが、制作の場を京都に移したと推測される。春井工房の作品は海外に若干のこっている。

19　山中吉郎兵衛は弘化三年十二月十二日に生まれ、大阪北浜で古美術商をはじめ、明治二十七年山中商会を設立する。

20　芝川家に遺された資料註42によれば出品作にこの作品が含まれていない。

案等に一層研究せば大に好評を博するに至るべし」とある。この共進会の漆器部門は四人が審査員にあたっているが、京都の戸島弥兵衛、奈良の吉田辰之助、金沢の沢田宗次とならんで、大阪から初めて安原清が選ばれている。これらの記述から関西府県連合共進会において、大阪からの漆の出品が徐々に増え、評価もがっていることがわかる。明治二十八年の第四回内国勧業博覧会では芝川又平（初代又右衛門）の蒔絵合資会社優品四種六点を出品し、うち群蝶蒔絵料紙硯箱は有功三等賞をうけるなど高い評価をうけている。

さらに明治三十一年（一八九八）に京都で開催された全国漆器漆産府県連合共進会の復命書〈資料③〉によれば、明治三十年（一八九七）の調査時に大阪における漆器生産業者は二百十一名、職工五百九十名、産額は八十七万一千余円、この共進会への出品者は大阪府からは十一名、出品数は六百八十九点とかなりの数に増加している。[21] この時の主な種類は文台硯箱、高卓、平卓、文箱、書棚、手箪笥、冠台、飾棚、額、広蓋、重箱、吸物椀、盃台、盃洗、菓子器、巻莨入、花瓶、火鉢、碁盤、化粧道具、襖縁、衝立、釣衣桁、枕、床縁、手提箱、弁当箱、江戸膳、燭台、三腰刀掛、人力車、下駄、蝙蝠傘、仏壇、仏具、紡績用木管等など、人力車、仏壇のように大きなものから、盃台のように小さなもの、紡績用木管など特殊な実用品など多岐にわたる。

そして、この共進会では大阪の芝川又右衛門の紙製丸盆素地が一等賞を、安原清、田中定次郎の硯箱、藤原伊兵衛の文台硯箱が三等賞を、森本治三郎の人力車、東門五兵衛の蝋色卓、小国長兵衛の碁盤、木村楠右衛門の会席膳、山中清七の仏壇が四等賞を受けている。

以上が博覧会や共進会の資料をてがかりに見た明治期の大阪漆器の動向である。大阪における漆器製作が明治二十年代から増加に転じていったことがこれらの資料から明らかである。こうした大阪の漆器生産業者の急増に関わる手がかりは昭和十六年（一九四一）に編纂された『東区史』第四巻文化篇第二章芸術第三節美術第二款工藝〈資料⑩〉にも窺われる。同書が編纂された昭和十六年頃、大阪で活躍していた蒔絵師の系統の大半が明治十八年頃、大阪の漆器問屋によって加賀から招聘された人々であるという記述である。明治十八年頃、本町四丁目にあった漆器商田中平三郎（一八六五～一九三二）が金沢で活躍していた加賀蒔絵の名匠浅野惣三郎を招いたことなどが具体例としてあげられる。[22] この本には具体的な名前は他にはあがっていないが、後述のように、安原清、越田尾山、神戸雪汀など金沢出身の蒔絵師が明治末から大正にかけて来阪している。また同書は京都からも川端佐七が明治三十年頃大阪今橋一丁目に移住し、髹漆蒔絵及び古器物修繕を大阪ではじめたこと。川端佐七は抹茶器に多くの名作を遺し、大阪において茶人に重用され、その系統が川合漆仙に繋がるとも記している。[23] 次ぎに『日本漆器新聞』、『漆と工藝』誌上に大正末から昭和初期にかけて掲載された二つの記事を手がかりに、大阪の蒔絵師、塗師について整理してみたい。

（二）雑誌記事にみる大阪の漆工

資料④は『日本漆器新聞』大正十三年（一九二四）第二巻第二号に掲載された「大阪中興漆器の思ひ出と当時の儀」である。『日本

21 『全国漆器製産府県連合共進会復命書』明治三十二年　農商務省大臣官房秘書課

22 『東区史』第四巻文化篇第二章芸術第三節美術第二款工藝

23 『東区史』第四巻文化篇第二章芸術第三節美術第二款工藝

漆器新聞』は大正十二年（一九二三）から昭和八年（一九三三）にかけて発行された月刊誌である。漆器製造販売に関わる人のための機関誌で、柴崎風岬（一八九〇～一九七三）が編集していた。柴崎は福井県の出身で早稲田大学を卒業後、森村市左衛門（一八三九～一九一九）[24]の後援を得て漆器研究所を主催、全国を訪ねて賛同者を集め、日本漆器同業会を結成し、大阪を本拠地に本紙を発行した。内容は美術工芸としての漆器、漆器産業などと多岐にわたる。「大阪中興漆器の思ひ出と当時の儀」には安原清（一八四四～一八九九）、中川芝泉（一八四六～一八九七）、川端佐七（一八五三～、今村洋渡（一八四七～一九二二）の四名の略伝が載る。[25]

資料⑤は昭和九年五月、『漆と工芸』三九八号に掲載された大阪府立工芸奨励館工芸部[26]、福田萍哉による「郷土名工並助長奨励功労者小伝」である。『漆と工芸』は明治二三年に設立された日本漆工会の発行した『日本漆工会報告』（明治二七年～二八年）、『日本漆工会雑誌』（明治三三年～昭和二年）、日本漆工会会報（昭和二年～四年）に続いて昭和五年から十六年まで発行された。

「郷土名工並助長奨励功労者」の追彰とは昭和九年五月二十六日、社団法人大阪府工芸協会が創立十周年にあたり、大阪の工芸に貢献した功労者の慰霊を追彰する目的で、同会の記念事業として行われ、府下の工芸技術者と工芸振興、指導、奨励などの方面に功労のあった物故者数十名が追彰された。そのうち漆工関係者とその伝記を簡略に記したのが「郷土名工並助長奨励功労者小伝」である。追彰者には春井清三郎、安原清（機芳）、中川忠兵衛（芝泉）、二代川端佐七、浅野惣三郎（可秀）、三代吉田一閑、初代今村洋渡、初代川合漆仙があげられ、工芸助長奨励功労者として芝川又平（又右衛門・百々）、田中平三郎、住友吉左衛門（春翠）があげられている。『日本漆器新聞』に記された安原清、中川芝泉、川端佐七、今村洋渡の四名は「郷土名工並助長奨励功労者小伝」にもとりあげられる。以上二点の資料に記された漆工は以下の八人である。[27]

（イ）春井清三郎（一八二四～一八八四）大阪、丸越組（池田清助）、〈資料①⑤〉→六代春井清三郎（恒眠）

（ロ）安原清（機芳）（一八四四～一八九九）金沢、池田清助、小国長兵衛〈資料②③〉〈資料④⑤〉→安原祥窓

（ハ）浅野惣三郎（可秀）（一八五六～一八九〇）金沢、田中平三郎〈資料⑤〉

（ニ）中川忠兵衛（芝泉）（一八四六～一八九七）京都、芝川又右衛門・住友吉左衛門〈資料④⑤〉→高橋芝豊、大津定次郎、橘芝青、山川芝仙他

（ホ）二代川端佐七（近左）（一八二三～一九〇一）京都、春海商店　戸田商店　官休庵〈資料④⑤〉→代々

（ヘ）川合漆仙（一八六八～一九二八）大阪、川端近左〈資料⑤〉

（ト）吉田一閑（一八五一～一九一四）京都　官休庵〈資料⑤〉

（チ）今村洋渡（一八四七～一九二二）大阪〈資料④⑤〉

24　江戸の武具商に生まれ、外国貿易で財をなす。日本陶器の創立者などとしても有名な実業家。

25　柴崎の関心は徐々に漆から工芸全般へとひろがり、昭和八年には『日本漆器新聞』はより広範囲の工芸を扱う『汎工芸』に移行した。

26　大阪府立工芸奨励館は大阪府の工業の振興のため、昭和四年四月に設置された。

27　以下八名ヲ（イ）～（チ）にあげた。人名（生没年）、出身地、提携先（経営者）、〈出典資料〉、→人名は後継者の順に記した。

一方蒔絵の振興に功のあったものとして「郷土名工並助長奨励功労者小伝」にあげられたのは芝川又平（一八二三～一九一二）、田中平三郎（一九〇二～一九三二）、住友吉左衛門（一八六五～一九二六）があげられる。二つの資料を中心にいくつかの資料もとに表1の①上部に当時の大阪で活躍した髹漆、蒔絵師の生没年、職種、出身地、誰に招聘されていつ大阪に来たか、師と弟子、博覧会や展覧会等への出品作などについて一覧としてまとめた。

（イ）春井清三郎（一八二四～一八八四）

五代春井清三郎は天保十四年薬種商四代目清三郎の長男として大阪に生まれた。蒔絵師小谷弥（孫）兵衛[28]に入門、師とともに長崎に赴き、輸出漆器を制作した。後に京都で国内向けの蒔絵を作り、慶応元年に大阪で開業する。彫師・唐木細工師・塗師・木地師などを雇い内外の人の嗜好にあう作品を考案制作し、工場を新設したが、明治十七年に四十二歳で病没した。資料①によれば没する直前には東区博労町三丁目にいて、池田清助の丸越組と組み輸出品を制作していたと記される。資料①によれば五代の没後その子が六代清三郎を嗣いだとある。六代は京都富田幸七の元で修行し、春井恒眠（一八六九～一八三六以降不祥）を名乗っている。春井清三郎、春井恒眠についての作品は海外に残っている。五代春井清三郎の作としては旧ホジソンコレクションに「春井」「清」の銘のある二十四孝蒔絵書棚があり[29]、また恒眠の作品は多いが、代表作としては一九二一、訪英した皇太子裕仁（昭和天皇）が英国皇太子エドワードに贈った蒔絵書棚（ハリリコレクション）がある[30]。

（ロ）安原清（機芳　一八四四～一八九九）

安原清は天保十五年金沢で生まれ、絵画を森春岳に、蒔絵を五十嵐與右衛門に師事した[31]。明治十六年（一八八三）貿易商池田清助に招かれ、神戸で輸出用蒔絵の製作にあたった[32]。明治十八（一八八五）年春には神戸から大阪鰻谷東ノ町に移った。資料②によれば安原は大阪で初代池田清助と小国長兵衛のために仕事をしたとある。

安原を招聘した初代池田清助（一八三九～一八九九）は和歌出身の美術商である[33]。最初は行商で資金を蓄え、慶応二年（一八六六）兵庫開港にともない、神戸に移り、外国船舶の乗組員を相手にした雑貨商をはじめた。後には外国人の嗜好に合わせた美術工芸品を製作し海外に輸出する越後屋を開く。明治十四年頃には殖産興業政策の推進者であった前田正名（一八五〇～一九二一）の援助により資金を得て、イギリスに丸越組ロンドン支店を出し、日本の美術工芸品を製作販売したというが、なかなかうまくいかなかったようで、明治十七年（一八八四）、京都に本拠を移し幾人かの職人をかかえて、蒔絵、陶磁器、象嵌など美術工芸品の製造輸出を行いはじめた。前

28 「府県漆器沿革漆工伝」には弥兵衛、「郷土名工並助長奨励功労者小伝」によれば孫兵衛とある。

29 Grace Tsugumi Fine Art のウェブサイトによる。

30 Ferns feathers Flowers, Museum of Jack kumst, 2001

31 五十嵐與右衛門は江戸時代の初めに京から金沢に出向き、蒔絵の技を伝えた五十嵐道甫の流れを汲む蒔絵師。五十嵐道甫の縁者は京に帰るが、その門人で、五十嵐姓を名乗ることをゆるされた庄兵衛の四代以降が與右衛門を名乗った。

32 資料④によれば明治十五年、⑤には明治十六年とある。

33 池田清助（清右衛門）は神戸で開業した店は越後屋といい、明治二十八年京都に池田合名会社を設立、神戸店を山中商会に引き継ぐ。明治四十一年には京都美術倶楽部を設立する。池田については山本真紗子『唐物屋から美術商へ』平成22年晃洋書房刊第三章二美術商池田清助に詳しい。

述の春井清三郎も池田の依頼による仕事をしている。

小国長兵衛については、記録が見いだせず、詳しい履歴は不明であるが、明治二十三年（一八九〇）に開催された第三回内国勧業博覧会第二部美術第四類に漆器蒔絵硯箱を二合、明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勧業博覧会に同氏の名義で蒔画平目地宇津山城料紙箱を出品しており、出品者の住所欄には大阪市東区高麗橋三丁目とあることから、大阪の美術商あるいは漆器卸商か漆器商であったと推測できる。

来阪時に既に四十歳になっていた安原清は製作ばかりでなく、明治初年以来殖産興業政策の一環として、各地で開催されていた共進会に関わり、明治二十一年（一八八八）に開催された第三回から明治三十年（一八九七）におこなわれた第六回にかけて審査員をつとめた。[34] また明治三十一年（一八九八）京都で行われた全国漆器漆生産府県連合共進会では同じく大阪の今村洋渡とともに審査員をつとめている。その間明治二十六年（一八九三）には日本固有の美術を守り、その復興をはかることを目的として結成された日本美術協会大阪支会の設立に尽力し、さらに明治二十七年（一八九四）、殖産興業を唱える前田正名によって組織された全国の織物、陶磁器、漆器、金属器、製紙、紙製品、雑貨、敷物の七種の品評会である五二会に漆器評議員として関わった。安原清は明治三十二年（一八九九）三月十四日五十七歳で死去した。

安原清が明治期に金沢の蒔絵の技を大阪に移入し、漆工を産業として定着させようとした功績は、大正末から昭和初期の大阪工芸界においては知られていたが、現在ではその作品を確認することができない。しかし各種の博覧会、共進会の出品目録に安原清の名をみることができ、また池田清助、小国長兵衛名義で出品された漆器のなかにも安原清の作が含まれていると考えることができ、今後作品の所在をめぐる調査が必要である。安原には長男重次、次男祥窓がおり、それぞれ蒔絵師となったが、重次は二十四歳で夭逝、次男祥窓は大正末から昭和初期にかけて蒔絵師として、農務省工藝展覧会、帝国美術院展などで活躍した。祥窓については作品がある程度遺されているが晩年の詳しい履歴は確認できていない。

（八）浅野惣三郎（一八五六～一九三二　可秀）

「郷土名工並助長奨励功労者小伝」によれば、浅野惣三郎は安政三年（一八五六）、加賀に生まれ、金沢で鶴来又右衛門、高田茂三郎（一八三六～一九〇二）について蒔絵を学び、明治二十三年石川県立工業学校美術工芸部描金科助教諭試補となり、後進の指導にあたるが、数年後に退職し明治三十五年（一九〇二）田中合名会社の委嘱により大阪に移ったと記される。一方、『東区史』第二章芸術、二、漆工藝附陶磁工藝には、「蒔絵師浅野惣三郎の如きも、本町四丁目田中平三郎の委嘱に依り加賀より大阪に移り、大阪に於ける蒔絵工藝に尽力する処が多かった」とあることにより、田中合名会社は田中平三郎の会社であったことがわかる。浅野惣三郎は明治二十六年（一八九三）シカゴコロンブス博覧会、明治三十三年（一九〇〇）パリ万国博覧会の出品目録に作品があり、そのうちシカゴコロンブス博覧会出品作「団扇蒔絵手箱」は東京国立博物館、に、明治三十五年作「蒔絵松に鳥図棚」は石川県立美術館に収蔵されている。また田中合名会社名義、明治三十三年パリ万国博覧会、明治三十六年第五回内国勧業博覧会、明治三十七年セントルイス万国博

34 「大阪中興漆器の思ひ出と当時の儀」

覧会に出品作も浅野の作品である可能性がある。浅野惣三郎は大阪で漆工制作が盛んになりつつあった明治二十年代に来阪した。しかし大阪における漆工に限界が見られた明治後半以降の動向についてはよくわかっていない。

浅野を大阪に招聘した田中平三郎は慶応元年（一八六五）大阪に生まれる。開国そして明治前期にかけて、漆をはじめとした手工芸品は輸出品として人気があったため、大阪でもその制作は盛んであった。その質の低下を望まなかったため田中兵三郎は今村洋渡ほか、良工を招聘したり、化学者三山喜三郎（一八七三～不祥）[35]を呼ぶなどして、漆の改良を試み明治三十年（一八九七）には、同業者の競争、粗製濫造を防ぐ目的で大阪漆器商組合を組織し、また翌年島佐兵衛とともに大阪市に働きかけ、市立図案調整所を設立するなど、漆器図案の改良に尽力した[36]。

（ニ）中川芝泉（一八四六～一八九七）

資料④によれば、中川芝泉は弘化三年（一八四六）京都に生まれている。幼い頃から絵を好み、十七、八歳の頃から鈴木玉船[37]について蒔絵を学び、二十歳で芝川又右衛門に招聘され、大阪に移り蒔絵に専念した。明治二十一年には芝川が住友吉右衛門と共同出資ではじめた日本蒔絵合資会社（浪花蒔絵所から改称）の教授長となり、蒔絵の制作と指導にあたった。直接の門下には高橋芝豊、大津定次郎があり、浪花蒔絵所の出身者には橘芝青、山内芝仙などがいる。中川芝泉は明治三十年、五十二歳で病没している。日本蒔絵合資会社は内外の博覧会に優品を出品し、受賞しているが、シカゴ万国博覧会に出品され東京国立博物館に保管されている「芙蓉薔薇鶉蒔絵額」など日本蒔絵合資会社出品作を中川芝泉の主導で作られた作と考えることもできる。

（ホ）川端佐七（二代近左）（一八二三～一九〇一）

川端家は京都二条高倉上ルで代々岡山藩、豊岡藩の御用油商をつとめたが、蒔絵に転じ、近江屋佐兵衛の名から初代が近左と号した。元治元年（一八六四）蛤御門の変で火災にあったため、慶応二年（一八六六）、岡倉天心のすすめと三井家の後援により長男川端玉章（日本画家）とともに江戸に移った[38]。

二代近左（一八二三～一九〇一）は本名を佐七といい、初代（一八一八～一八八九）の弟。初代の長男玉章が画家となったため、二代を継ぎ、茶道具商春海商店や戸田商店、袋物商土田湖流らの招きによって大阪に移り住む。茶具の製作とともに、光琳、光悦風の蒔絵を好み、博覧会、共進会の審査員を勤め、大阪漆器青年会のために尽くした。

三代近左（一八五三～一九一二）は初代近左の三男義洞京都に生

35　三上平三郎は東京帝国大学卒。漆塗料が専門。工業試験所部長、朝鮮総督府中央試験所長などを勤める。「彩漆試験報告」東工試報 No.4 p1-9東京工業試験所などがある。

36　田中平三郎の名は田中平三郎は初代大阪美術倶楽部会長と『東区史』文化篇に記される。また明治四十四年に大阪商業会議所から発行された『大阪商工名録』には「漆、漆器、塗物」の業者のなかに田中合名会社（婚礼用其他古美術漆器兼雑類、大阪、卸小売）とある。

37　鈴木玉船（一八三一～一八九九）は京都の蒔絵師。明治九年、山本利兵衛、富田幸七とともに金刀比羅神社本宮の天井・壁に蒔絵を施したことが知られる。

38　以下川端近左についての記事は以下の文献を参照した。「愈好斎宗匠と大阪を中心とした職方」木津宗詮『聴松―愈好斎の茶の湯―武者小路千家代十二世愈好斎聴松宗守居士五十回忌紀年』平成十四年　武者小路千家官休庵。

まれた。二代に跡継がなかったため北陸海運北陸汽船に勤務していたが、明治三十四年に大阪に来て家業を継いだ。彫刻、絵画にも造詣が深く、新しい工藝運動に活躍するが、明治四十五年五十九歳で没す。

四代近左（一八九一～一九七五）対三郎は、三代の兄の三男である。初代の長男玉章と二代の弟子川合漆仙が相談により、対三郎を三代の養子とした。四代近左が大阪との関わりの深かった武者小路千家愈好斎の職方として活躍したことにより川端家がその後も代々大阪で漆工を続けていくことになる。

五代近左（一九一五～一九九九）川端三義は奈良に生まれ、四代に入門、四代の養女（姉の末子）の婿養子となり、川端家を継ぐ。

六代近左（一九四七～）本名一价、五代の長男平成十三年、近左を襲名する。

（へ）川合漆仙（一八六八～一九二八）

漆仙は本名を信太郎といい、初代川端近左に入門。資料⑤によれば、藤田伝三郎の知遇をうけるとある。藤田伝三郎の蒐集した道具を入れる箱、いわゆる藤田箱制作を一手にひきうけた指物師は二代芦田真阿（一八七〇～一九二八）である。そのため川端左七とともに、川合漆仙もその塗りをひきうけたことが推測される。大正天皇銀婚式に際して大阪府からの献上品の制作に関わり、大阪市美術協会、大阪府工芸協会の設立にも参画した。川端近左同様武者小路千家愈好斎の職方として家元好みの道具を制作し昭和三年に没した。息子の幸太郎が大林家の後援で跡を継ぐが後に廃業し、芦屋の打出で書店を営んだという。

（ト）吉田一閑（一八五一～一九一四）

三代吉田一閑は嘉永四年（一八五一）京都に生まれる。吉田一閑の初代は休兵衛といい、江戸末期に大阪で鞘を作る仕事をしていたといい、二代一閑（～一八七七）は一閑張を職としていたという。三代は二代の次男で熊七といい、家業を継ぐとともに武者小路千家一指斎に入門する。

四代一閑（一八八一～一九四七）は本名を光太郎という。明治十四の生まれで、武者小路千家愈好斎との関わりも深く、武者小路千家の職方としての道具を数多く作った。京都の飛来一閑に対して浪華一閑といわれる名工で、「竟求一閑」と署名した。四大の長男佐久穂は東京美術学校の漆器科を卒業して将来を嘱望されていたが戦死した。[39]

（チ）今村洋渡（一八四七～一九二二）

嘉永元年（一八四七）川辺郡神崎村[40]の医師の家に生まれる。名は清吉、京都の佐野長貫（寛）に入門、明治八年今村平助の養子となる。明治二十二年（一九八九）から二年間、アジア、オーストラリアなどをまわり帰国する。日英博覧会の大阪市出品物に漆を塗るなど公共の仕事も多くこなし、明治天皇大葬の御轜車の塗装を拝命する。大正十一年没。二代今村洋渡は大橋氏が継ぐ。

以上、資料④と⑤に加えて若干の資料から八人の漆工についてまとめた。博覧会や共進会の資料によれば、ほかにも漆器商、塗師、蒔絵師などの名が多数あがる。これらのなかには金沢から大阪に来て蒔絵師となった越田尾山（一八七四～不祥）、同じく神戸雪汀（一

39　本稿には間に合わないが、吉田一閑については作品調査のご許可をいただいた。

40　資料⑤には神崎郡川辺村とあるが、川辺郡神崎村（現尼崎市）の間違いか。また佐野長貫は長寛（一七九四～一八五六）の誤か。

八七五～一九七一）、島野三秋（一八七七～一九六五）など作品や履歴がいくらか残るものもあるが、資料⑤に名前のあがる中川忠兵衛、今村洋渡のように履歴はわかるが作品が確認できないもの、そして目録に名前があがる東門五兵衛、蔦田英輝のように、現在では履歴、関連作品ともに確認できないものもある。以上をまとめて表1の①の下部に簡単に整理した。

二、近代大阪における漆器制作

（一）漆器商と輸出

江戸期には椀や膳など、日常漆器が主体であった大阪における漆器制作が増加に転じたのは明治二十年代のことである。

明治十八年（一八八五）に上野公園で開かれた繭糸織物陶漆器共進会に大阪からの出品は前述のようには五人二十三件にすぎない。同年刊行された『繭糸織物陶漆器共進会第四区陶漆器審査報告附録講話会筆記』には大阪府は陶漆器とも生産量が少なく、そのため共進会への出品も少ないと述べている。翌年に農商務省が発行した『府県漆器沿革漆工伝統誌』（資料①）には大阪府の漆器業者として東門五兵衛、春井清三郎など三名があげられるのみである。

状況の変化は明治二十一年（一八八八）に開催された第三回関西府県連合共進会から徐々に見られる。大阪からは後に日本蒔絵合資会社を起こす実業家となった芝川又右衛門が五点の作品を出品しており、二年後の明治二十三年に開催された第三回内国勧業博覧会には東門五兵衛、蔦田英三郎（英輝）[41]、芝川又右衛門、安原清、小国長兵衛、加藤武左衛門が加わっている。さらに明治二十六年のシカゴコロンブス博覧会には山中吉郎兵衛、日本蒔画合資会社などが出品。そして、明治二十七年に開催された第五回関西府県連合共進会には、大阪からの出品が五十七点、四十名、うち受賞者が十九名と急激に増加する。報告書には大阪府出品漆器の進歩が著しく金沢に追いつくぐらいであると書かれていおり、形状図案等を研究すれば好評を博することに間違いないとも述べられている。そしてこの共進会以降は漆器部門の審査員に大阪から初めて安原清が選ばれている。さらに明治二十八年の第四回内国勧業博覧会では芝川又平の日本蒔絵合資会社優品四種六点を出品し、うち群蝶蒔絵料紙硯箱は有功三等賞をうけるなど高い評価をうけるに至っている。

明治三十一年（一八九七）に開催された全国漆器生産府県連合共進会の復命書によれば、同年における、大阪における漆器生産業者は二百十一名、職工五百九十名、産額は八十七万一千余円とある。この共進会には大阪府からは十一名が参加し、六百八十九点を出品しており、芝川又右衛門の紙製丸盆素地が一等賞を、安原清、田中定次郎の硯箱、藤原伊兵衛の文台硯箱が三等賞を、森本治三郎の人力車、東門五兵衛の蝋色卓、小国長兵衛の碁盤、木村楠右衛門の会席膳、山中清七の仏壇が四等賞を受けている。

大阪における明治二十年代の漆器生産の増加は、政府による殖産興業政策、輸出漆器の制作と関わっている。神戸の開港にあわせて神戸、大阪の貿易商が漆器を商うために、大阪に工人を集め輸出漆器の制作が開始された。池田清助の越後屋、丸越組を通して、英国に作品を輸出した五代春井清三郎、そして六代春井清三郎（恒眠）。同じく池田によって金沢から招聘された安原清を筆頭に、田中平三

41　明治末、四十四年に大阪商業会議所から発行された『大阪商工名録』に蔦田栄三郎（新古美術蒔絵漆器所道具、大阪、製造）とある。

郎によって招聘された浅野惣三郎など、大阪には蒔絵師が集められた。これは大阪が江戸期に漆の集積地であったこと、全国所産地から漆器を集めて販売する漆問屋があったこと。職工の街である京都と貿易港神戸に近かったこととも関わっている。そのため、東京、金沢、京都など元来の漆器産地に比べて少し遅れをとりながらも、明治二十年代から三十年代にかけて大阪における漆器制作は頂点に達した。意匠の工夫、後に述べるように紙製漆器の考案など、大阪においては良質の漆器を作ることに目標がおかれた。しかし既に述べたように日本からの輸出漆器全般にみれば、輸出を目的に量産した安価で質の悪い漆器が大量に作られていった。粗製濫造の結果、海外で漆器の人気は明治後半以降凋落する。そして時代の主流は手工業から軽工業さらには重化学工業へと推移する。その後の大阪は急速に工業都市へと展開して、大阪での漆器制作は終焉を迎える。

そのような明治期の大阪において極めて特色ある漆器制作を行ったのが芝川又右衛門（又平・百々）であった。次にその事蹟を簡略に紹介したい。[42]

（二）芝川又右衛門と日本蒔絵合資会社

芝川又右衛門（又平・百々）は文政六年（一八二三）中川重次郎の子として、京都富小路通丸太町下ルに生まれた。父重次郎は金沢の中川仁右衛門の養子で京都に移住して漆器制作に携わっていた。後に重次郎は重右衛門を名乗り、長男が中川重次郎を継いだ。

芝川又右衛門は十二、三歳の頃から近藤有芳に入門し需書と岸派の絵を、また兄について蒔絵を学び、天保十一年（一八四〇）十八歳の時独立し、中川利三郎、雲洞と号して蒔絵の制作を始めた。しかし銅版染付に興味を持ち、弘化二年（一八四五）伊万里から陶工を呼びよせ、鹿背山焼を始め、蒔絵師を廃業せざるをえなくなる。そして大阪の唐物商に陶器の販売先を求めて出向いた時、百足屋芝川家から娘婿にと請われ、嘉永四年（一八五二）芝川家に養子に入り、唐物小間物商を始める。江戸時代末の開国、明治維新を乗り越え、芝川又右衛門は実業家として成功をおさめ、唐物商組合設立、堂島米商会所設立、大阪商法会議所設立などにも関わった。その間明治八年（一八七五）には家督を二代目又右衛門に譲り又平と名乗った。

芝川又平が再び蒔絵に関わるようになったのは明治十八（一八八五）、九年頃である。道修町四丁目の持ち家を職場として京都から中川忠兵衛（一八四六～一八九七）らを招き蒔絵の後継者の養成を始める。明治二十一年（一八八八）には組織的に蒔絵を習得させ、その技術を伝承するために美術蒔絵学校設立を企てる。しかし蒔絵師を養成する学校の運営には莫大な経費がかかることから、その設立はすぐには実現せず、明治二十三年（一八九〇）四月、同じく大阪の実業界を率いる住友吉左衛門（一八六五～一九二六）と折半で出資し、道修町四丁目に組合事業とし「有限責任浪花蒔絵所」を漸く開設した。蒔絵学校設立趣意書には設立の目的として「漆工、蒔絵の美術を奨励し本邦特有の技倆を保存し且つ益々発達せしめ後学を養成せんことを主とし漆工蒔絵の技倆を授く」とある。芝川の浪花蒔絵所で指導にあたったのは、京都から招かれた蒔絵師中川忠兵

42　芝川又右衛門と日本蒔絵合資会社については、資料⑪『芝蘭遺芳』（津枝謹爾編　芝川又四郎刊　昭和十九年）、『日本蒔絵合資会社顛末』（千島土地株式会社から資料の御提供をうけた）を参考にした。

衛であった。学生は試験によって選抜され、修業期間は五年とされた。授業時間は一週間八十四時間、一日十二時間、午前七時始業で、午後七時修業。毎月一日、十五日、年末年始が休み、生徒は通学と貸費生の二種であった。貸費生は卒業後三年間は学校に通い後進の指導をすることを条件とした。

開校と前後して、明治二十六年（一八八三）米国シカゴで、コロンブス博覧会が開催されることが発表された。住友の総理事広瀬宰平（一八二八～一九一四）は博覧会への参加を日本固有の蒔絵を世界に紹介する好機ととらえ、出品に向けた制作が始められた。この博覧会出品のため、有限責任浪花蒔絵所も組合事業から法人組織へと改革がすすめられ、明治二十六年（一八九三）は芝川又平を社長とする有限責任日本蒔絵合資会社が誕生する。

シカゴコロンブス博覧会には日本漆器は通常品と美術品に分けられ、美術品は美術館に出品された。日本蒔絵合資会社では事前に森村市太郎、岡倉天心（市八六三～一九一三）、今泉雄作（一八五〇～一九三一）らと、出品作について検討を行い、出品物は「花鳥蒔絵棚」、「吉野山蒔絵料紙文庫」、「獅子蒔絵文台硯」、「光琳硯箱」、「片輪車蒔絵菱箱」、「瓜型菓子器」、「茅屋菓子器」「花筏菓子器」、「柿形菓子器」、「石榴形菓子器」、「琵琶形菓子器」、」「生子形菓子器」、「八角貝尽蒔絵菓子器」、「乗合舟蒔絵硯箱」、「蒔絵客椅子」、「蒔絵夫婦椅子」、「蒔絵小児椅子」、「蒔絵長椅子」、「蒔絵テーブル」とし東京に送った。東京での監査の結果、このうち「乗合舟蒔絵硯箱」、「花筏菓子器」、「八角貝尽蒔絵菓子器」の三点が美術品として美術館に展示されることとなる。博覧会にはこれらの渾身作が送られ、日本蒔絵合資会社からは野呂邦之助が同行した。しかし運悪く米国の不況によって、うち「吉野山蒔絵料紙文庫」、「蒔絵客椅子」の二点の作品が銅牌を受けるが、出品作は売れ残ってしまう。

このほか日本蒔絵合資会社は明治二十八年（一八八五）第四回内国勧業博覧会、明治三十年神戸で開催された第六回関西府県連合共進会、同年同じく神戸で開催された五二会、大阪で開催された日本美術協会大阪支会、明治三十一年（一八八八）全国漆器生産府県連号共進会などに日本蒔絵合資会社は蒔絵を出品し各種の賞を受賞している。

その間、芝川の徒弟の第一期生として橘猪太郎（芝青）が育ち、また浪花蒔絵所の卒業生として山内安次郎（芝仙）、井筒猪之助、井上よねの三名の名が記録にのこる。さらに明治三十年、三十一年に職工として在籍したものの記録として、中川忠兵衛[43]、柴田清七、木下貞吉、橘猪太郎、井上治助、加藤一郎、柳川治平、古原直松、尾関源太郎、吉田七之助、吉田為之助の名があがる[44]。

明治二十六年四月から二十九年六月の三年間に製造した作品数は料紙文庫（八）、文台硯箱（七）、板文庫（十）、棚（二）、花月台（三）、遠山台（三）、硯箱（八十五）、茶箱（三）、吸物碗（一九束）、菓子器（四十八）、四重箱（六十一）、盃洗（三十四）、盃台（三十）、香合（六）、棗（十五）、箱（二十七）、額（三）、広蓋（十二）、煙草盆（一二八）、煙草入（二三）、巻煙草入（三十五）、煮物椀（六束）、煙草入筒（十二）、小箱（三十四）、入子重（八）、短冊箱（一）、重

43 その間中心となって指導にあたっていた中川忠兵衛が明治三十年に五十二才で病没している。

44 このうち橘猪太郎が資料④にある橘芝豊、山内安次郎が山内芝豊と推測できる。

箱（一荷）、盆（十五）、小楊枝入（九）、小刀類（六十四）、箸（三十）、紙製盆類（三〇九）、価格の概算約二万四千二百十八円。一年間約八千余円、紙製の盆をのぞいて約百点の作品を制作していた。

作品の制作日数は、大作「波草花蒔絵文台硯」一組の場合、八百九十日と十時間三十分。所用金粉六十二匁六分一厘、制作原価計六百二十二円九十銭一厘、小品「山水八角菓子器」の場合、制作日数七十四日三時間五十分。所用金粉八匁三分五厘、制作原価計九十円十三銭八厘である。

これを小國（小国長兵衛か）に百三十五円で売却したと記しているから、工程と原価の内訳を見ると一個を製造するのに時間がかかりすぎ、多量の金粉を要するため、これを工場として経営することは困難であったことがわかる。このように博覧会では優秀な成績を収め、宮内庁買上などの実績を積んだ日本蒔絵合資会社であったが、営利を目的とした会社として経営することが困難となり、明治三十一年十月二十二日、住友家と協議の上、会社を解散し出資金を精算分配、後は芝川家の事業として半製品の完成に従事することと、別に設けた紙製漆器工場に力をそそぐことになった。しかし、芝川又平の蒔絵に対する思いは醒めたわけではなく、明治三十三年のパリ万国博覧会、明治三十六年の第五回内国勧業博覧会に、芝川又右衛門の名義で蒔絵が出品されていた。

日本蒔絵合名会社解散の後、芝川が取り組んだ紙製漆器について少しだけふれておきたい。芝川と紙製漆器制作との関わりは明治二十六年頃に遡る。シカゴ万国博覧会に漆器を出品する際、欧米の乾燥した空気の中で耐えることのできる漆器をどのようにして作るかが課題となった。東京工業学校校長手島精一（一八五〇～一九一八）から紹介を受け、かつてゴッドフリート・ワグネルについて応用化学を学んだ紙製漆器研究者間瀬精一に、芝川家が出資する形で明治二十七年一月から西区三軒屋町にあった芝川家の土蔵内に仮工場を設け、日本蒔絵合資会社の事業として紙製漆器の制作が開始された。

明治三十年には英国のヘンリーペリー社から汽動水圧器を購入し製造を開始、明治三十三年（一九〇〇）には、紙製漆器工場を蒔絵会社から切り離し、木津川沿い千島新田で芝川紙製漆器工場として創業した。漆器の素地は鋼鉄製の型によって圧搾するというたしかに理想的な手法であったが、金型の製造を行う鉄工所をも経営監督するなど、さらに手間を増やすこととなり、製品価格を抑えることができず、経営困難に陥る。

その結果、明治三十六年（一九〇三）には蒔絵事業から完全に撤退、紙製漆器工場一本に絞り、農商務省から補助を受けるなど立て直しを図る。その間明治三十九年には工場組織を改め、芝川漆器合名会社と社名を変更する、しかし結局経営はうまくいかず、明治四十四年（一九一一）、工場からの出火を機に休業し、大正五年（一九一六）年芝川漆器合名会社は解散した。

蒔絵師としてスタートをきった実業家芝川平であったが、良質の蒔絵、漆器の制作を事業として継続し、蒔絵を量産することはついに適わなかった。とはいえ、日本蒔絵合資会社が短期間に多量の良質な蒔絵を制作したことは記録により明らかである。しかし実際に確認できているのは数点にすぎない。残念なことに銘を持たないものが多く、日本漆器合名会社と記す箱がない限りはなかなかその作と特定することが難しい。おそらく相当数の作品があるはずであるから今後僅かな基準作品を分析して、作風や材質の特徴を特定し、

日本蒔絵合資会社の制作した作品を同定する作業が必要である。[45] また紙製漆器についても今のところ基準作がわかっていないので、調査せねばならない。

（三）武者小路千家十二世愈好斎好みの茶道具

大阪における輸出を視野にいれた組織的な蒔絵制作は明治十年代に始まり明治二十年から三十年代にかけて興隆するが、明治期をもって終了する。しかし大阪にはこうした産業としての漆器制作とは異なるもう一つの動きがあった、それは産業都市大阪の経済人の嗜好、茶の湯との関わりである。

資料⑩『東区史』には金沢とならんで、京都から大阪に来た工人について記されている。その一人が吉田一閑で、「明治十四年京都北野神社に献茶が行われたのを動機として此技再興され、以後、藤田・平瀬・広岡・鴻池等の庇護奨励に依り継続して、今日に及んでいる。」とある。またもう一人は川端佐七で、「明治三十年に大阪に来り、今橋一丁目に住し、家業の髹漆蒔絵及び古器物の修繕を業とした。彼は抹茶器に多くの名作をだし、大阪茶人にその技を愛せられた。この系統から川合漆仙の如き漆匠も出てゐるのである。」と記している。

それでは本来京都で活躍するべき茶の湯の職方がなぜ大阪に来たのだろうか。一つにはもちろん大阪の富豪の間に茶の湯が流行し、伝来の道具とともに、当代の道具を制作する職人が必要になったこと。そしてもう一つの理由は武者小路千家官休庵の家元愈好斎が大阪との深い関わりの中で育ったたことにある。

大阪、そして範囲を少し広げて阪神間に居を構えた数寄者とは平瀬露香（一八三九～一九〇八）、藤田伝三郎（一八四一～一九一二）、住友吉左衛門（一八六五～一九二六）、鴻池善右衛門（一八六五～一九三一）、嘉納治兵衛（一八六二～一九五一）、上野理一（一八四八～一九一九）、村山龍平（一八五〇～一九三三）、小林一三（一八七三～一九五七）など枚挙にいとまがない。また茶道具を斡旋する道具商戸田弥七、春海藤次郎、山中吉郎兵衛など関東に劣らぬ目利きが大阪にはそろっていた。

愈好斎は明治二十二年（一八八九）表千家久田家の玄乗斎宗悦の次男として京都に生まれた。愈好斎は五歳で伯父にあたる武者小路千家一指斎の嗣子となる。しかし一指斎は明治三十一年五十一歳で病死、この時愈好斎はまだ十歳であったため、義母と叔母とともに一指斎の生家である表千家にひきとられた。武者小路千家は大阪の平瀬露香が家元預となり、補佐役として筆頭職分格の木津宗泉[46]とともに家元の機能を代行することになった。

愈好斎は大阪の中学を経て、第三高等学校、東京大学へと進んだ。そして大正四年（一九一五）卒業とともに結婚し、大阪の木津宗泉（聿斎）のもとで武者小路千家の茶の湯を学ぶ。同時にこの頃大國壽郎（釜師）、吉田一閑（塗師）、福田平兵衛（堀江の商人）、磯田狸庵、など大阪の数寄者、職工と知り合い交流を深めた。

そして大正七年（一九一八）武者小路千家宗守を襲名し、家元と

45 「芙蓉薔薇鶉蒔絵額」（東京国立博物館）『万国博覧会の美術』1-265、「山水蒔絵箱」（個人蔵）『万国博覧会の美術』1-184、「鴛鴦蒔絵硯箱」（東京国立博物館）、

46 木津家は初代木津宗詮（一七六〇～一八五八）が大阪木津の願泉寺に生まれ最初住職を継ぐが、後に江戸にでて松平不昧から茶を学び、その命により武者小路千家五代宗守一啜斎の門人となり、後に紀州家に使えた。

なった愈好斎は、大阪時代に知遇を得た職方を重用した。釜師二代與兵衛（與斎）（一九〇二～一九七九）、同じく釜師大國栢斎（一八五六～一九三四）・大國壽郎、釜師初代大森金長（生没年不祥）、指物師二代芦田真阿（一八七〇～一九二九）、三代芦田真阿（一九〇二～一九五三）、指物師萩井木遊軒（不祥～一九七三）、さらに大阪の指物師淡路屋弥次兵衛の孫にあたる三好木屑（一八七四～一九四二）、そして塗師四代川端近左（一八九一～一九七五）、川合漆仙（）、三砂良哉（一八八七～一九七五）、四代吉田一閑（一八八一～一九四七）、打出焼の二代和田桐山（一八九七～一九七七）、袋物師土田湖流、竹藝の山本竹龍齋（一八六八頃～一九四五）などがあげられる。

さて大正十四年十一月二十一日から二十八日まで名古屋松坂屋に巡回した「大阪府工藝品展覧会」の期間中、松坂屋七階管窺庵で催された茶席の道具は、当時の大阪の工芸家たちと茶道具との関わりをうかがう興味深い資料である。[47]

松手付莨盆火入灰吹付	久須来郎
飾火鉢一啜斎好	大森金長
金明竹花籠	山本竹龍齋
棚　桐引ざし　木津聿斎好	三好木屑
茶杓（官休庵箱書、銘門松）	三好木屑
茶入　ササ蟹蒔絵	越田尾三
香合　海辺松蒔絵	安原祥窓
編竹炭斗	上田尚雲齋
火箸（木津宗匠好　白銅飾）	大森金長
釜鈦　瓢頭白銅	大森金長
釜敷　藤編圓式	山本竹龍齋
莨盆	三好木屑
煙管	大森金長
香箸	大森金長
建水　南鐐餌畚形	大森金長
菓子器（愈好斎書付）	吉田一閑
蓋置　竹製	今橋春齋
菓子器（南鐐製ヤンポ）	飯田勝美
風呂灰匙	大森金長
風呂釜	大國壽郎
茶碗及水指	吉向十三軒
風呂先屏風	田村庄兵衛

先に紹介した官休庵愈好斎と知己の職方がならぶとともに、「啜斎好」、「木津聿斎好」、「官休庵箱書」、「木津宗匠好愈好斎書付」など、官休庵の好みの道具が用いられており、この大阪府工藝品展覧会における呈茶が官休庵によって催されたことがわかる。さらに漆について見れば、職方としてばかりではなく、数寄者としても愈好斎と親しい吉田一閑とともに、明治期に金沢から招聘されて大阪で仕事をしていた越田尾山が「ササ蟹蒔絵茶入」、安原祥窓が「海辺松蒔絵香合」をお道具として制作していることである。安原祥窓は金沢出身で大阪の漆工界を導いた功労者安原清の次男である。

安原祥窓は大正五年（一九一六）、十年（一九二一）、十一年（一九二二）の農商務省図案及応用作品展覧会に作品を出品しており、

47　冒頭で紹介した『近代大阪の工芸に関する総合的研究』「近代大阪の工芸と茶道」において、下村朝香氏が紹介しておられる。

工芸の出品が初めて認められた昭和二年（一九二七）から帝国美術院展に出品している。また越田尾山も金沢から大阪に来て蒔絵を業と、昭和四年（一九二九）から昭和十六年まで連続して帝国美術院展、文部省美術展覧会に出品している。[48]

この二人に見られるように、大正から昭和期にかけては、茶の湯の道具などを制作しつつ、展覧会に作品を出品するという近代的な工芸作家の生活様式が大阪においても形成されつつあったと考えられる。このほか金沢から来た神戸雪汀（一八七五～一九七一）という蒔絵師がいる。雪汀については大正五年から六年にかけて刊行された『浪華摘英』『続浪華摘英』にその履歴が簡単に掲載されているが、その後は吹田市にある西尾家で家礼として働きながら漆器を制作していたことしかわからなかった。しかし本年、雪汀が勤めていた西尾家を会場に、「蒔絵師神戸雪汀と西尾家」という展覧会が開かれており、その作品が漸く紹介されるに至った。[49] 展覧会に際して発行された小冊子によれば明治三十年に大阪に来て、藪内即庵の好みによる道具を作ったとあり、西尾家との縁も藪内家からのつながりによるようである。雪汀のように蒔絵を志すものの公の場で活動せず、特定の数寄者の家に抱えられたものもいたようである。

結語

以上、今まであまり省みられることのなかった近代における大阪の漆工界について、市史、区史、博覧会・共進会・展覧会関係の目録、漆工関係雑誌の記事などを手がかりに抜き出し、そこから導きだされる動向について概観した。

その結果、江戸期、水陸交通の要所であった大阪では、漆産地から樹液を集め精製加工して全国に卸売する漆商が活躍していたこと。そのため日常漆器を作る職人がおり自給自足が成立していたこと。しかし高級漆器については地の理を活かして産地である江戸・京都・金沢から取り寄せていたこと。また取り寄せると同時にそれを地方に卸売する漆器問屋が栄えていたことがわかった。

ところが江戸末の開国によって海外との交易が可能になると、神戸に近い大阪では輸出産業に目が向けられる。明治十年代後半、田中平三郎や池田清助など漆器卸商あるいは唐物屋と称する輸出商が工場を大阪に作り、職人を金沢や京都から呼び作品を制作させ欧米に輸出することをはじめた。このような輸出漆器の制作は明治政府殖産興業政策とあいまって増加する。大阪の場合は明治二十年代から三十年代にかけてがそのピークであり、大阪が産出する良質の蒔絵や漆器は内外の博覧会、共進会でも好評を得た。

そのような中、最初は蒔絵師としてスタートした実業家芝川又右衛門は自らの財力を用い、蒔絵技術を伝習する学校を作ろうとする。この学校は浪花蒔絵所といい、後に日本蒔絵合資会社と改称されるが、制作した作品は博覧会で高評価を得るものの、結局手間と材料費がかかりすぎ商売にならず、良質の漆器を量産することは不可能であるとして事業としては失敗に終わった。

大正期に入ると大阪漆工界は茶の湯道具の制作に関わることによって再生する。京都の武者小路家千家では家元一指斎が没した時、

48　表2参照
49　小さな特別展「蒔絵師　神戸雪汀と西尾家」平成二十四年三月十七日
　重要文化財旧西尾家住宅（吹田市文化創造交流館）

その養子が十歳であったため、大阪の平瀬家、木津家が家元を代行する。長じて木津宗泉によって大阪に於いて武者小路流の茶の湯を伝授された武者小路千家愈好斎は、大阪の職方と深く関わる。そしてその関係を大切にしたため、大阪の職工たちに官休庵の茶の湯道具を製作する機会が生まれる。大阪は産業中心であったため、市内から阪神間にかけては富裕な実業家がたくさん居住していた。これらの数寄者のなかには官休庵流を楽しむものもあり、大阪の職方の道具が茶の湯の世界で重宝された。職方のなかには、茶の湯の仕事をしながら、農商務省美術展、帝国美術院展、文部省美術展などに出品し、作家としての道を歩むものが現れる。

明治から昭和前期にかけての大阪の蒔絵師、塗師の動向は概ねこのようにまとめることができる。しかし時代は急激に変化する。昭和十六年の開戦によって蒔絵師や塗師は不毛の時代を迎えた。なかには徴兵された蒔絵師や塗師もいる。また残ったものも漆が統制され、道具や作品を作ることができなくなり、廃業したものも現れる。そして戦死された方々、空襲によって犠牲になられた方もおられる。大阪や阪神間の都市部は焦土と化し、作品の多くは失われてしまう。

また戦後大阪に現れた新たな文化はもはや塗りや蒔絵を必要とするものではなくなってしまい、大阪は蒔絵や漆器制作から遠ざかってしまう。そのため、長らく大阪の漆工については顕彰されることがなく、その存在が忘れられたまま今日に至ったものと推測される。これは蒔絵や漆に限ったことではなく、大阪の工藝全般に関して大なり小なりいえることである。冒頭に述べたように二年間にわたり、「近代大阪の工芸に関する総合的研究」として聞き書きなど資料収集を出来る限りすすめたが、既に半世紀前のことであり、廃業した人、大阪を離れた末裔の方々も多いようである。時期が少し遅かったと悔やまれる。しかしさらに調査をすすめて、現在わかっていない人々についての履歴を明らかにし、殆どその所在のわかっていない作品についての調査をすすめていきたい。

最後に「近代大阪の工芸に関する総合的研究」に加わる機会を与えて下さいました宮島久雄先生、武石勇二様、当館篠雅廣館長をはじめとした研究会の皆様、ご助成いただいたサントリー文化財団様、そして本稿を執筆するにあたり資料をご提供下さりご助言賜りました皆様に心より感謝申し上げます。